

8 「山・住」合同分科会 要旨

San·En·Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa

テーマ「安心して住まうことの出来る持続可能な地域づくり」

コーディネーター	豊橋技術科学大学	副学長	大貝 彰
報告者	NPO 法人 てほへ	副理事長	大脇 聰
コメンテーター	NPO 法人 グリーンバレー	理事長	大南 信也
行政	飯田市	市長	牧野 光朗
行政	設楽町	町長	横山 光明
行政	東栄町	町長	村上 孝治
行政	豊根村	村長	伊藤 実
行政	阿智村	村長	熊谷 秀樹
行政	根羽村	村長	大久保 憲一
行政	泰阜村	村長	松島 貞治
行政	喬木村	村長	市瀬 直史
経済	掛川商工会議所	会頭	鈴木 俊光
住民	NPO 法人 てほへ	理事長	伊藤 静男
住民	和合むら	世話人	吉田 弓

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／豊橋技術科学大学
大貝副学長



皆様、こんにちは。ご紹介いただきました、
本日、コーディネーターを務めさせていただ

きます豊橋技術科学大学の大貝と申します。

私、この三遠南信サミット「山・住」合同分科会については、もう何人かの首長とは顔なじみになったかと思いますけれども、4、5年続けて、分科会のコーディネーターを務めさせていただいております。本日もまたよろしくお願ひしたいと思います。年1回、市町村長、そして、経済界のトップの方、民間、住民の団体の方が集まる、本当に貴重な会であります。この分科会では特に、「山・住」ということで、中山間地域での移住であるとか、定住であるとか、あるいは持続可能な地域づくりをどうしていくかということについて情報交換をしながら、また、その次のサミットまでの間、それぞれがいろいろな取り組みを

やっていくというようなサイクルであります。

本日は飯田市の牧野市長初め、参加者の皆様には、どうかよろしくご協力のほどをお願いいたします。

それでは、本日の進行について、まず、お話をしたいと思います。

最初に、前年度サミット議論のまとめ、それから、今回のテーマについて、事務局から説明をいたします。

次いで、NPO 法人てほへの大脇 聰副理事長様から、「奥三河・東栄町で育まれた26年の軌跡～地域を愛し、土地に根差す覚悟が未来を創造する～」についてご報告をいただきます。

その後、参加者の皆様と意見交換を行っていく予定にしておりますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、早速ですけれども、事務局からまず、前年度の議論についての説明をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

事務局

それでは、前年度の議論について、確認させていただきます。

前年度の「山・住」合同分科会でのまとめを3点としてまとめさせていただいております。

まず、1点目といたしまして、三遠南信自動車道あるいは新東名高速道路等の広域の道路基盤整備の効果を生かしながら、雇用創出、そして、定住促進を目的とした産業分野あるいは観光分野の政策を、これから、より一層連携しながら推進していくこと。

2点目といたしまして、自然景観、森林資源や祭り街道等の伝統芸能などが中山間地域の持つ魅力であり、こういった資源を地域内外に発信しながら域外から交流人口をふやしていく、そのための施策を検討していくこと。

3点目といたしまして、1点目、2点目を踏

まえまして、こういった施策を推進していくために、この圏域内の行政あるいは経済界など、さまざまな分野での市町村の枠を越えて、広域連携の強化をより一層推進していくこと。

以上3点となります。

今回のテーマでございますが、将来に向か、大きな人口減少が予測される中、この地域においても少子化対策が急務となっております。地方だからこそできる暮らし、働き方、子育てといった地域の環境や地域の連携を生かし、将来にわたって安心して暮らせるまちづくりを議論するため、「安心して住まうことのできる持続可能な地域づくり」を今回のテーマとして設定したところでございます。

それでは、大貝先生、よろしくお願ひいたします。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

それでは、続いて、「奥三河・東栄町で育まれた26年の軌跡～地域を愛し、土地に根差す覚悟が未来を創造する～」という題で、NPO 法人てほへの副理事長であります大脇聰様よりご報告をいただきます。

では、よろしくお願ひします。

■ 報告

NPO 法人てほへ 大脇副理事長

皆さん、こんにちは。

私、NPO 法人てほへの大脇聰と申します。今日は15分ほどの時間をいただいて、報告をさせていただきたいと思います。

私は、皆さん、よく御存じの方も多いと思いますが、和太鼓集団「志多ら」というところが本職であります。そのプロデューサーということで、4年前に東三河で行われたサミットから、ずっとサミットのほうにも参加させていただいております。ちょうどそのころから、現場の舞台をおりて、プロデューサー

業ということで、いろいろなところに顔を出させていただきました。

その中で、いろいろ「志多ら」の舞台のことを話すことはあるのですけれども、現場でどのような形で地域の中に溶け込んでやってきたのかとか、どのようなことが東栄町で起きているのかというところをお話しする機会は今までなくて、今回、こういう時間をいただきましたので、少し報告をさせていただきたいと思います。

まず、タイトルが「奥三河・東栄町で育まれた26年の軌跡」ということで、「志多ら」は、もう間もなく結成27年目に突入します。そういう4半世紀の団体となっていました。実際に「志多ら」が東栄町と出会ったころのお話を少しさせていただきます。

実は、北設楽郡の設楽からグループの名前をとったのではないです。もともとは愛知県の小牧市というところでプロの和太鼓集団「志多ら」ということで結成しました。これは、志多良神という芸能の神様がいて、そのご神体が太鼓であるというようなところから、「志多ら」という言葉を使って、志を持った者が多く集まるということで結成をしました。

最初、結成したときはこのような感じでやっていました。でも、このように人がいっぱい写っていますが、座員は3人で、あとは全部助っ人という、中身と見た目は全然違うという感じでスタートしました。

そのようなところで、東栄町の中央小学校で太鼓のクラブの先生を探しているという時に、うちの代表がフィギュアスケートの伊藤みどりさんの振りつけをするNHKの番組を町の方が見て、「志多ら」という名前にびんときたのか何かの縁で声がかかり、東栄町に拠点を移すことになりました。

まだバブルが弾けていない、ぎりぎりのころです。食べていかなければいけないので、熱海の大きなホテルで、1年間、住み込みで興業をしていました。稽古場として、今、住ん

でいるこの学校ですが、借りたはいいけれども、もぬけの殻でした。ホテルで、外国人の歌手が歌って、「志多ら」がたたいて、もう鉢巻きの間に札束を入れられるような、そのような時代の話です。

そのようなことをやっていたので、その興業の公演が終わったときに会社が倒産しました。これは、「志多ら」の前身の、最初に立ち上げた会社です。それが倒産したときに、メンバーの中で、もっとエンターテインメントの世界を極めていって、ラスベガスを目指したいというメンバーと、東栄町でしっかり根づいて活動していきたいというメンバーと大分裂をしました。

今の「志多ら」の原点になっているのが、このときに残ったメンバーと、私を含め、今の上の先輩人になっているメンバーです。半分分かれたチームも、今や九州のほうで、テレビに何回も出ている有名な太鼓チームになっています。

ですので、和太鼓業界の中で、目指した道は違いましたけれども、それぞれ活躍しているということになります。ここに少し写真がありますが、ど派手な公演をしていました。

今の「志多ら」の現状ですが、我々は「志多ら」を、有限会社にしました。これまででは、会社ではない組織でやっていたのですけれども、周りの方のお話の中で、将来ずっと残していく団体にしたいなら会社にしたほうがいいということで、有限会社にしました。舞台のメンバー、現役の演奏者は7名、研修生が1名、それから、舞台をおりた制作のスタッフ、プラス制作として「志多ら」に入ってきたメンバーが7名おります。地元の方にパートで2名入ってもらっています。NPO法人ではへというのは、「志多ら」のファンクラブがずっとあったのですけれども、それをNPO法人化しました。現在、そちらのNPOのほうでスタッフが3名、東栄町の協力隊員として一緒に活動しているメンバーが1名、今年から始めたカフ

エの営業でパート3名ということで、この24名でやっています。

全員がIターン・Uターン者ということでやっているのですけれども、私もIターンですが、東栄町民として22年目になるので、人生の半分以上は東栄町にいるということです。子供も2人おりまして、子供は東栄町生まれ、東栄町育ちということです。この1番上2名というのが私ですけれども、夫婦とも「志多ら」のメンバーで、子供も2人で、空き家を買って住んでいます。「志多ら」の代表とナンバー2の2人は女性ですけれども、地元の方と結婚して、子供が3人、1人となっています。このような家族構成の中でやっています。

「志多ら」は、最初は食べていけないので、一緒に1つ屋根の下で暮らしていましたが、それをすることが目的ではないので、若くて長いメンバーは、今、東栄町内の町営住宅などに住んでいます。最新情報で、メンバー同士でまた新たに、今年に入って結婚したメンバーもいます。そういうことで、どんどん、どんどん広がりを見せているということです。

東薗目という村に住んでいるのですけれども、花祭というお祭りが「志多ら」を東栄町に根づかせてくれました。我々が東栄町で、ここで本当に町のために自分たちの音楽を生かしていこうと思えたのは、やはり花祭というところが1番大きいキーワードです。1994年、花祭の舞の中で「志多ら舞」を奉納という形で演目をやらせていただきました。これも、最初は大反感を食いました。外からの応援の方とか、お祭りを研究されている方からは、「『志多ら』がこのように入していくことで祭りが変わってしまうぞ」と言われたりもしましたが、現在は、我々も祭りを変えるつもりでやっているのではなくて、村人としてお祭りに参加させてもらってやってきたということで、21年目の花祭を迎えてます。

舞台に上げる作品がどうしてもピックアップされますが、実は、裏方の準備から、太

鼓から、笛から、片づけから全部、私、1年目から舞もやりましたが、地元の舞も全て、村人としてやっていることがあるので、だんだん、それを知ってもらって理解をしてきてもらったかなと思います。

住民としての「志多ら」のメンバーの意識の変化と、「志多ら」メンバーに対する周りからの変化というのがあって、ここまで続いているなと思います。

我々の仕事は、芸能、アーチストとして舞台に立つののが仕事ですので、そういう文化の力で何とか町を元気にできないか、花祭を大切に、ずっと受け継いでいきたい、何人も2世がおりますので、子供たちのためにも、この町を残して、魅力あふれる町にしていきたい、そのようないろいろな思いの中で、ファンクラブをNPO法人にして、行政ともうまくタッグを組んでやっていける1歩を踏み出そうということで、6年前にNPO法人をつくりました。

そのような中で取り組んでいるものとして、ここに青字で書いてある3つの大きなものがあります。

まず1つ目は、情報をしっかりと発信しようということで、奥三河のき山放送局の大野というカメラマンを「志多ら」のメンバーが初めて、ばちを持ったことがないスタッフとして勧誘してきました。

たまたま会って、彼を口説いて、「志多ら」の寮で、寮生と一緒に暮らして映像を撮ってくれ、それを発信することを仕事してくれということで、「志多ら」のスタッフになってもらって、今、ユーチューブで番組をつくったり、ティーズで流させてもらったりしています。これは、「奥三河」とついていますので、奥三河の全ての市町村の番組を満遍なくつくっています。「最近は新城が多いぞ」と言われていますが、いろいろな町の情報を流させてもらっています。

それから、「のき山学校プロジェクト」と

いう廃校を利用した活動を始めました。いろいろな県の事業などを使わせてもらって、今年から、東栄町の指定管理ということで、「東栄町体験交流館のき山学校」という名前で運営しております。その中に図書室を持ってきており、「Café のつきい」という名前でカフェの営業も始めました。「木造校舎を利活用した体験交流の夢創造空間」ということで、太鼓のイベントはもちろんあるのですけれども、そこに付随して、森の中で音楽を奏でるとか、教室の中に、こういうようにわらを敷いて自然を感じるとか、あとは正月に正月遊び、日本人の四季のいろいろな文化を体験できる場所をつくろうということでやっています。

館内は、こういうチェンソーアートの作品も展示したり、祭り部屋、フリースペース、読み聞かせの会をやってもらったり、町内外の方に利用していただいています。

それから、自然体験・環境整備事業ということで、「蒼の森～ふるさと暮らし塾～」というのをやっています。これは、自分たちが音楽をつくって、日本中、世界中、公演に行くわけですけれども、自分たちの音楽は、暮らしの中や周りの人とのつき合いの中から、いろいろインスピレーションをもらって、それで曲をつくるものですから、そこが元気でないといい想像力が出てきません。地域が元気でないと、地域の自然がいい環境でないと、自分たちの音楽は絶対いいものにならないぞという思いがあるので、そういう中で、こういう環境整備事業などにも取り組んでいます。

そのような中で、「太鼓のよそ者が変化を生む」というような記事を書いていただいたりしました。それから彼女は、東栄町出身で外へ出ていたのですけれども、地元のものを使ったカフェをつくりたいということをお父さん、お母さんにお話しさせてもらって、帰ってこないかということで、今、Uターンで学校のカフェの中で、パティシエとしてケーキをつくっています。

今、東栄町の地域おこし協力隊との連携も進めています。1人は、この学校の運営と一緒にやることでやっているのですけれども、ほかの協力隊員とも一緒にになって、カフェで料理を提供するというようなことに取り組んでみたらとか、そのようなことでいろいろなことを進めています。

そのような取り組みは、またゆっくりホームページとかいろいろなもので見てもらえばわかるのですけれども、どう変化してきたかというのを、少しだけデータにしてみました。

「志多ら」が来る前の昭和62年、東栄町全体は世帯数が1,794、人口は5,915名で、東薗目は、世帯が43でした。人口が137名です。このときには、まだ「志多ら」は来ていません。平成7年から住民票を持ってきたメンバーが9名いますが、平成27年まで世帯数としては若干減なのですけれども、人口はどんどん減っています。これは、超過疎・高齢化の村ですので、寿命でお亡くなりになられる方も多数みえまして、その減少率に比べて、東薗目は、逆に、若者世代、我々が20代、30代のときに入ってきて、地域で結婚して子供が生まれてというようなので、特殊な状況になっているということになります。

今は、東薗目地区だけでも12名の「志多ら」、てほへのスタッフの住民票があります。そこにプラス子供が6名、村の中の23%が「志多ら」の関係者であります。これは、結婚した先のご主人とか、そのご両親とかは数に入れていないので、そこを入れると、もう少し増えると思います。

それから、ここは、村の中だけで増殖していった人口が、外へ住み出して、だんだん、だんだん出ていっているのと、町内に移住で来た方に一緒に働いてもらったりしているので、東薗目地区からスタートしたものが町内に膨れ上がって、人口の増加にも少しづつ、広がってくるのかなと思っています。そのようなところが東薗目で、細かく見ていく

と、まだもっといろいろなことがあるのかもしれません。

東薙目という花祭のお祭りは、私ども「志多ら」が来るまでは、東栄町の11か所の中で、1番最初に、もうやれなくなる村だと言われていたそうです。それが、今は、村の中に子供が1番住んでいる村になりました。全メンバーは、19歳から50代で構成されて、I ターン23名、U ターン1名ということで、2世も増えています。新年度から、また研修生が、これをつくったときはまだ決まっていませんでしたが、5名増えます。そのような形で、どんどん、今、増えています。

花祭というお祭りが、私たちが本当にここ の東栄町に住みついて、ここで生きていこうと決めた1番の大きなところです。祭が好きだということもありますし、祭をしている人が好きだということもあります。その環境が好きだこともあります。そのような村に、今、変わってきました。

「志多ら」の特質ということで少し書きました。今日、大南先生のお話の中でもありました、私たち、仕事を持つて、この東栄町に移り住みました。最初のスタートが、地域おこしをしようということではなくて、26年前の話なので、自分たちがプロとして太鼓で生きていこうという思いだけで、親の反対を押し切って、給料もないような生活からスタートしたのが「志多ら」です。そこから来て、移り住んで、覚悟を持って住みつきました。そして、いろいろな方と出会って、ここの大三河・東栄町で暮らしていくという想いになつたということです。

田舎に定住していく中で、我々もすごく思っているのは、やはり地域愛とか、あとは、そこで生きていく覚悟とか、自分の仕事をやり抜いていく覚悟みたいなもの、それから、地域に対するプライドやいろいろなもの、そういうものがないといけません。ただ、その地域へ行けば仕事になって、お金がもうか

るからだと、お金がもうからなくなったら、では、もう少し違うところに行って暮らすとなってしまうのかなと思うので、本当に大事なのは、やはり、その地域愛みたいなものの、それが自然に対しても、人に対しても、仕事に対してもいろいろなものがあると思いますが、そのようなものかなと思っています。

ですので、何もない田舎、不便だとかいろいろ言われますけれども、そこには本当にいろいろな人がいて、そういう人それぞれがいろいろな求心力になって、人の魅力と地域の魅力がくついたときに、本当に人を引きつけられるような、磁石になるような力が出てくるのかなと思っています。

我々も今まで、外から入ってきた者が中心にやっていましたが、今度、実は、私の長男がU ターンで戻ってきて、「志多ら」の跡継ぎになるということです。帰ってくるということが今度の研修生から生まれるときになりました。そういう形で、東栄町で生まれた子たちは、花祭をやって暮らしていきたいと思っている子がいっぱいいると聞いています。そういう地元生まれの子たちに本当の地域の魅力や、地域で何が困っていて、何が仕事になって、何のチャンスがあるのだぞということをしっかりと、小学校、中学校の間に根づかせていかないといけません。高校がない町になってしまっているので、1回外には絶対出しまいますが、いずれは戻ってきてもらいたいです。戻ってきた人のほうが、愛着心や地域愛はやはり強いかなと思います。

我々のような変わり者のように、I ターンでやってきて、自分の生まれたところでもないところに、いろいろな思いで根づく人ももちろんいますので、そういう両方から、これから我々にできるバックアップをしていきたいと思います。東栄町の東薙目では、このようなことが起き始めています。我々もNPOを立ち上げたときに、東栄町だけが元気になるだけではない、「志多ら」だけが元気になるだ

けではないという思いでスタートさせました。ですので、最初は、奥三河という名前を使っていましたが、この三遠南信地域の会にいろいろ出させてもらったり、皆さんにご縁をいたたく中で、やはりこの地域、県を越えたこの地域が元気になっていくことがすごく大事なことで、そういう連携というものを作今後も視野に入れながら活動していきたいと思っています。

26年の活動の中で、そのようなところまで来ています。そのようなところで、今日の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／豊橋技術科学大学
大貝副学長

ありがとうございました。

今の大脇様の話の内容について、もしご質問があれば、受けたいと思いますが、いかがでしょうか。

これは勝手な私の感想ですが、今日の一連の基調講演からの流れを踏まえると、どうも今回のサミットのキーワードは、文化とか芸術、芸能がキーワードになっているかなと思っております。

それでは、ここからは、意見交換に移ってまいりたいと思います。

まず、最初に、それぞれの地域だからこそできる働き方、あるいは子育てなど、そのラ

イフスタイルについて、あるいは、安心して暮らせるまちづくりを実現したり、移住・定住を促進したり、それにつなげるための地域課題にはどういう課題があるのか、さらに、今後の取り組みについて、どのような考え方をお持ちなのかという点についてお聞かせください。順番に指名させていただきますのでよろしくお願ひいたします。

それでは、トップバッターとして、飯田市の牧野市長からお願ひしたいと思います。よろしくお願ひします。

飯田市 牧野市長

皆さん、こんにちは。飯田市長の牧野でございます。

本日は、この三遠南信サミット2016in東三河の「山・住」の合同分科会に参加をさせていただきまして、てほへの大脇プロデューサーからもお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。

中山間地域に、こうした形でIターンの皆さん方が定住していくというのは、本当に大変なことだったと思うのですが、これだけの長い時間をかけて東栄町に定住され、そしてまた、若い子供たちがこれだけ育ってきているというのは、本当にすばらしいことだと、改めて敬意を表させていただくところでございます。

飯田市におきましても、85%くらいが中山間地という地域ですが、特に、天竜川の左岸に当たります、竜東、あるいは遠山郷といった中山間地域におきましては、今、お話をありましたように、持続可能な地域づくりをどのように進めていくかは大きな課題と思っています。

飯田市は合併して大きくなってきた市でありますけれども、旧町村の範囲というものは、自治会単位で残してきた地域であります。今ですと、まちづくり委員会という言い方をしておりますが、そうした町や村のころのコ

ミニティをそのまま残す形で地域をつくっておりまます。従いまして、今、飯田市は20地区から構成されておりますが、それぞれの地区というのは、昔の町や村の形態そのものということになります。

そうした中で、この中山間地域におきましては、20地区共通の政策ではなかなか難しいものがあるため、中山間地には中山間地用の政策をしっかりと入れていこうという考え方をとらせていただきまして、中山間地域の地区を指定して、その地区に対しては、他の地区とは違う政策を採り入れていくというやり方をしております。

つまり、中山間地域振興計画を飯田市としてつくりまして、その計画に基づいた形で政策を行っているところです。特に、この政策の目玉になっておりますのが、地域振興住宅として、これは、それまでの市営住宅の考え方とは一線を画しております。中山間地域における若い子育て世代の定住を狙い、その地域に住んでいただける、こうした子育て世代の皆様方のための振興住宅をつくっていこうと考えたものです。

これは、若い子育て世代の皆さん方といろいろと話し合いをしていく中で、実は、市営住宅に入る条件は満たさないけれど、何とかこの地域に住めないだろうかという若い皆さん方の声に応えて、つくらせていただいたものであります。既に、こうした実績は大分出てきており、まだ順番待ちをしているという方もいらっしゃいます。各地区において、まちづくり委員会が中心になり、どういった住宅にして、どういった人に住んでもらうかということを考えてもらうという、言ってみれば、かなり各地区の自主性を踏まえた形で行っている取り組みです。

そういう取組みを進めることで、この人口減少、少子化・高齢化の波を何とか乗り切っていかないと考えるわけですが、各地区の人口の動態を見ますと、やはり、ま

だまだ厳しい状況にあると言えます。

そこで地域外のお力もお借りしようと、大学連携も一緒に進めております。こうした中山間地域に大学の皆様方に入っていただき、その地区と大学との連携を進める中で、課題解決に向けた方策を考えているものもございます。

遠山郷であれば東京農工大学、あるいは千代地区であれば和歌山大学といった、それぞれの地域にとりましてパートナーになるような、そのような大学との連携も踏まえた形で取り組みを進めています。

こうした取り組みを進めているうちに、私も話し合いにも参加させてもらっていますが、若い皆様方が、この地域にとってはどういうに課題解決に取り組むことが望ましいか、ということに非常に关心を持って取り組んでもらえるようになってきました。

「志多ら」の皆様方も非常に若い方が、この地域の課題について考えてもらえるようになったというのと同じように、今、中山間地においては、若い方々が地域活性化の取り組みを強めてきているというのは、私にとっては大変心強く思うところであります。

今日のこの「山・住」の合同分科会におきましては、こうした中山間地域におけるこれから定住促進に向けて、いろいろな意見交換ができるいいと思っております。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

幾つか、地域振興住宅の話であるとか、大学の学生が中山間地域の中に入っています、いろいろな取り組みをやられているというお話でした。

それでは、続いて、豊根村の伊藤村長から、お話を願いいたします。

豊根村 伊藤村長

こんにちは。豊根村長の伊藤でございます。

今日は、「山・住」の合同分科会に参加させていただいたのですけれども、去年まで、私、主に「道」分科会のほうに出ていたような気がしております。

若干、私のほうで現在の状況を報告させていただきたいと思っております。

ご案内のように、私どもは、愛知県でいうと1番東北端に当たるわけなのですけれども、この三遠南信地域に来られると、どうしても言っておきたいというのは、北が長野県に接しておりまして、東が天竜川を境にして静岡県と接しているのは豊根村だけと思っておりますけれども、そのような地域にございます。

そして、地理的には愛知県から言うと1番奥なのですけれども、新しく三遠南信自動車道が開通したことによって、浜松市内まで1時間半くらいですので、東京に出るときには、ほとんど浜松駅から新幹線に乗って出させていただきます。また、それで、飯田市までも1時間圏域ですので、これで2027年のリニア新幹線ができると、またまた次がよくなる、そのような地域でございまして、今からそのことを意識した地域づくりに、今、取り組んでいるところでございます。

そして、私どもは、今、本当に高齢化が進んでいるのですけれども、その高齢化を支えるのは誰かといったら、少ない若い人なのです。その人たちをしっかりと支援して高齢化を乗り切っていこうと思っております。

もう1つは、今、私ども、60万人の観光客を100万人にしようというプロジェクトが動いております。そういったことで、観光と交流で地域づくりをしっかりと支えていきます。

さらに、私ども行政区が5つあるのですけれども、それぞれの地域が頑張っていただいて、「それぞれの地域が元気にならないと、いや、豊根村は元気にならないよ」と、そのような思いで、今、3つの柱で村づくりをやって

いたところに、ちょうど地方創生という新しい流れになったわけでございます。

そのような中で、私どもが今思っていること、やっていきたいということが地方創生にそのままはまったかなと感じ、即、積極的に取り入れたということで、去年の8月に公表させていただいて、それに向けて動き出しております。

具体的には、人口構成は非常に難しいのですけれども、しっかり見たとき、人口が増える要素はどこにもないのです。ですので、どうしようかということを真剣に住民の方々と話し合う中で、私ども、1,200人しかいない村なのですけれども、何とか900人でとめていこうということで、今、900人を目標にしております。

それはどういうことかというと、今、私どもの地域、高齢化率46%なのですけれども、毎年3家族くらいずつ、長男、次男対策で帰ってきていただく、Iターン、Uターンを含めて、3家族ずつ入ってきていただく、これを繰り返していくと900人でとまるということで、900人を設定させていただいたのですけれども、それを裏返して分析しますと、高齢化率が25%まで下がるということと、生産年齢層は、現在、1,200人から1,300人のときの生産年齢層が維持できるということ、もう1つは、小規模な村ですので、どうしても子供が少なくなるのですけれども、子供の数を一定数にしていきたいということで、複式学級も解消できること、このようなことも含めながら、今、取り組んでいるところでございます。

いろいろなことをやってきたのですけれども、大事なことは、地域に人が入ってきてくれて、どれだけ地域が元気になるかということです。私どもは、今、医療連携の取組として、村の中に診療所を1つ持っているのですけれども、住民を見ておりますと、静岡県の浜松医大の辺までも医療圏域に入っていますし、長野県の飯田病院、それから、阿南病院

も医療圏域に入っています。そして、愛知県もとすると、新城市、豊川市まで医療圏域に入っていまして、私どもは県境を越えてでも住民が行き来している地域ですので、静岡県の一部、それから、長野県の一部に通うことについて、通院費の4分の3の補助金を出させていただいて、どこの病院に行っても生活できる地域づくりをさせていただいているところでございます。そして、そういうことができることによって、ここでも住める地域づくりをしっかりと確立していかなければならぬと思っております。

最後に、先ほど言ったような地域にありますので、茶臼山高原を何とか100万人にしていくという1つの方法として、去年10月に、「三遠南信地域の食の祭典」というのを計画させていただきました。これは、各三遠南信地域、静岡県、それから長野県、三河地域の各市町村に声をかけさせていただきまして、この圏域、35あるそうでございますけれども、19の市町村から、我が町、我が村の自慢を持ち寄っていただいて、32店舗の出店をいただきました。当日は1万2,000人ほど来ていただき、にぎわったのですけれども、これをどんどん続けて、地域の圏域をPRする場所にしながら、地域の交流を図り、元気を出していきたいなという思いをいたしているところでございます。

住環境の件ですけれども、私どもは、村営住宅も100戸ほど持っているのですが、どうしても腰かけになってしまふということで、3年前から、譲渡型の定住促進住宅を建てさせていただいております。これは、簡単に言いますと、「30年住むと土地も家もあなたにあげてしまうよ」という取り組みでございまして、当面、5戸建てさせていただいて、大体それがいっぱいになって、今年も新たに2つつくっています。3LDKの2階建てですけれども、木造でつくらせていただき、家賃は月3万円、中学生以下の子がいると1人3,000円引きます。1番多

くて、5人子供がいる家庭もありますし、月1万5,000円で入っていると、そのようなこともあります。住環境全て整えて、私どもは通える地域をつくっていこうと、また、それで生活しやすい地域をつくっていこうと、そのような思いで、今、人口を定着させるということで努力をしているところでございます。

よろしくお願ひいたします。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

印象的だったのは、毎年3家族9人ずつ入ってきてもらって、現在1,200人の村ですから、人口減少を900人で止めるという、かなり大きなインパクトがあることでした。ありがとうございました。

それでは、続いて、今日唯一、経済界からの代表であります掛川商工会議所の会頭、鈴木様より、取り組みについてご報告をいただければと思います。よろしくお願ひします。

掛川商工会議所 鈴木会頭

掛川商工会議所の鈴木です。

掛川市は静岡県ですけれども、位置的なことを言いますと、大体浜松市、静岡市の中間であります。また、北は山間地、南は遠州灘ということで、中心に東海道線、新幹線の掛川駅があるというような町でございまして、農、住、商、工がバランスよく配置された町ではないかと思っております。

掛川市にとっても、この人口の減少は非常に問題であります。今現在12万人ですが、10年後に10万人を切るのではないかというような予測がされている町です。

私は、この人口減少に対応して、どうしたら人口が減らないで住むか、あるいは増えていくかということに関して、4つの要素に分けて、今、取り組んでいることと課題ということでお話をさせていただきたいと思います。

まず、1つには、やはり人口が減少するということは、働く場所があるかないかということではないかと思いますので、掛川市においては、工業団地の造成であるとか、誘致策であるとか、そういうものを推進しております。

2つ目が、やはり住んで安心か安全かということが言われますので、この辺について掛川市は、まず医療体制について、隣の袋井市と一緒にになって中東遠総合医療センターという病院をつくりました。もとあった掛川病院のところへ、地域医療ということで、全てを集めた医療、介護の団地みたいなものをつくりました。これで、例えば、介護施設であるとか、あるいは老人福祉施設であるとか、そこで相談をするところであるとか、保育園であるとか、特別支援学校であるとか、全てをそこに集めて、これは、市民にとって、医療の問題については、1つ解消されたということです。

それと、南に海がありますので、津波対策ということで、今、掛川方式で、レベル1に対応するような12メートルくらいの防潮堤を、盛り土をして、そこへ植林をするというようなやり方でつくっておりまます。これが安心・安全の対応策で今やっている主なところです。

3つ目が、やはり、先ほども大脇さんがおっしゃっていましたけれども、そこに住むということは、誇りを持って住むということではないかと思います。掛川市は、精神的には報徳思想というものが流れておりまますので、この至誠、勤労、分度、推譲、まとめて言えば、そういう報徳思想があります。その思想に基づいて、今現在の人がかなり楽しく住んでおりますので、この辺の思想的なものを続けて、新しく移住していただく方にも、同じような可能性が出てくるといいと思っております。

4つ目の要素として、やはり住んで魅力がある場所でなくてはいけないということです

ので、この辺が1番難しいところかと思うわけです。今、掛川市は協働のまちづくりというものを進めております。協働のまちづくりといつても、いろいろありますけれども、端的に言うと、自治会へ自由に使っていい予算をつけているという協働のまちづくりで、それぞれのコミュニティーで考えなさいよというやり方をやり始めています。これが、そこに住んで、昔のようなコミュニティーができる、住民がどういう魅力を持ってくれるかということですけれども、これは、若い人たちから見ると、少し違う方向にもなっているところもありますので、若い人たちの意見を取り入れながら、この協働のまちづくりが進むといいと思っております。

以上、4つに分けて、働く場所、安心・安全、住んで誇り持つ、住んで魅力を持つ、その要素で話をさせていただきました。

ありがとうございました。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

先ほどの豊根村とは地域としてはかなり置かれている状況は異なる中で、それぞれ取り組みをされているということだと思います。

続いて、最初のご発言の最後になりますけれども、和合むらの世話人の吉田様より、取り組みについてご紹介いただけたらと思います。よろしくお願ひします。

和合むら　吉田世話人

ありがとうございます。私の暮らす阿南町の和合地区とは、広大な山間部で正に過疎・高齢化の厳しいところです。17年前に私が和合に暮らし始めたころ、350、60人いた人口が、今、300人を切って、もうたちまち250、60人という、深刻な限界集落です。

人生の中で、多くの知った人を短い間に失っていくということを初めて経験しておりま

す。

そして、いいことばかりではなく、本当にたくさんの地域の中での生きにくさも味わったこの17年間のうちに、私はたまたま和合を1回も出たいと思ったことがありません。その間に、引っ越してきて、また出ていった人たちもたくさんいます。もちろん私たち以外に住みついている人もいます。本当に来る人それぞれがそれぞれの個性をその地域で發揮して、それぞれの人間関係を築いています。

17年前と比べると今はIターン、Uターンということが本当に普通に語られるようになりました。かつては、「ちょっと変わった人だな」という印象を持たれることが普通で「オウム真理教じゃないの」と心配されるような感じだったのですけれども、もうその状況は、ずいぶん変わっているということを本当にひしひしと感じます。

日本全体が人口減少している中で、都会の過密した人口が、こういった山の中に移ってくるべきであることは確実なことと信じます。

私もそうですけれども、都会の生活に疑問を感じ、つかみどころがないような暮らし方に、生きている実感とか、都会にはない違ったものを求めているから来るのはですね。

三遠南信は、こんにちもこれだけのお祭りの宝庫だということで、今日の講演ではいいお話をいっぱい聞かせていただき、この地域の素晴らしさを改めて再認識することができました。私が山に住みついて本当に感動するのは、祭りが祭りだけあるのではなく、1年中の厳しい山の限られた資源とともにある暮らしの中で、その暮らしの営みをより安定させるために祭りが切り離せないものであるということを学んでいます。全ての伝統文化を少しでも継承し後世につなぎたい、そういう気持ちにすごく駆られました。

ですので、移住政策とか、仲介者の養成とか、そういうことも課題に上がってくるのですけれども、余り難しく考えずに、ここは本

当にいいところなのだという自信のもとに、どんどんいろいろな人に、「通過していただいても結構ですし、定住していただければなおりがたいくらい」の軽い気持ちで、さくさく受け入れて、1人ひとりに期待を余りしないほうがいいのではないかと思います。

今日も、てほへさんの素晴らしい事例を聞いたので、例えば面接をして受け入れたときに、そうではないとがっくりしてしまって、次のを受け入れる気力がなえてしまうということがあるかもしれませんけれども、きっと次はこんな人が来てくれますように思って、もう本当にいろいろな人がいて、いろいろな個性を持って、何が始まるかわからぬい、地域にはいろいろな魅力があって、外から見れば、「こんなこと」と思うことを種に、本当に大きなことが展開する可能性がいっぱい山々にはあります。私自身も微力ながら山と共に暮らす愛おしい日々について情報を発信し続けていきたいと思います。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

今までの発言とは大分視点が違っていますけれども、最初の大脇さんの話の中にあつた、地域愛というか、多分そういうところからの発言かなと思いました。

だから、この三遠南信には、いろいろな自然、あるいは景観、文化・芸能、さまざまな資源があって魅力的であり、それを自分たちが無理をしない範囲でもっともっと外に向けてPRをしていけばいいのかなという趣旨のご発言だったと理解しました。

三遠南信地域には、今申しましたように、さまざまな自然、あるいは景観、文化・芸能の資源がありまして、それぞれの地域において、地域の特性もあり、生活の違いもあり、さまざまなわけですけれども、それぞれの地域で、それぞれ持続して暮らせる暮らし方の

工夫がなされている、あるいは、その政策として、そのための課題に取り組んでいると感じております。

それでは、今度は、安心して持続的に暮らせる地域づくりを進めるという場合に、連携して取り組むべき課題というのが何なのかということのお考えをお聞かせいただけたらと思います。

まず、3名の方ということで、設楽町の横山町長から、よろしくお願ひします。

設楽町 横山町長

設楽町長の横山です。どうかよろしくお願ひします。

連携ということでございます。我々、特に北設楽郡の中山間地域にあるこの3町村が一緒になって、今までも、またこれからも、こうした体制を持続して、連携作業ということでやっていくことが、地域の住民の人たち、また、外から見える人たちにとっても、そうしたことがきちんと安定して運営ができるのかどうかという継続性、そういったものを重視していく必要があろうかと思っております。

その中の一環で北設楽郡公共交通活性化協議会というのを立ち上げて、各町村単位で、それぞれバスを運営しております。そのバスは、各自治体も隔たりがなく、それぞれ乗り入れができるように、また、病院ですとか、買い物ですとか、高等学校ですとか、そういったところへ他町村からも行き来ができる、そのような体制維持をつくっていこうということで、今、これを進めおりますし、まさに、こうしたことが地域で住む人たちの生活の基本になる部分であろうと思っておりませんので、これを継続していきたいです。

そして、もう1つは、情報ネットワークということで、光ファイバーも3町村一緒にあって、北設楽郡中、同じように、条件をともに利用ができるように、設置しております。約

40億円の経費をかけたわけですが、これの維持運営をずっとずっとこれからもやっていくわけです。毎年億という単位で維持経費というものがかかるまいります。しかし、お金にかえられない、また将来、我々の地域で生活をしていくために、先ほどの大南先生のお話にもあったように、若い人たちが我々のような地域へ来たいというときに何かできることはという中に、1つはITが自由に操作できる、そういう環境が整っているのだよというようなことを維持し、また、それを持っていて、そうしたものも地域の財産となっていく、そして、これから将来にわたって若い人たちも入ってきて、生活が継続できる、そのような要素にもつながるだろうと思っております。

それ以上に、今までそうですが、ごみですとかし尿といったものも一緒に管理運営に努めています。

そして、さらに、これから新東名高速道路等が開通をしていくことによって、多くの人が我々の地域にも入ってきていただける、そうしたものに期待をするところでして、来ていただいて見てもらう、そういった要素をつくり上げなければいけません。それは何かというと、やはり1つは、観光の資源の創出、それぞれ自治体の持っている施設、そういったものも全てを観光のチェーン化を図る、それぞれの特性を持った施設として紹介ができるように、そのようなシステムをつくっていく必要があろう、とも思っております。地域の魅力をつくり上げていく、こうしたものをこれから大きなテーマとして取り組んでいく必要があろうと思います。

コーディネーター／豊橋技術科学大学

大貝副学長

ありがとうございました。

それでは、続きまして、根羽村の大久保村長、よろしくお願ひします。

根羽村 大久保村長

根羽の大久保でございます。

私は、常日ごろ、先ほど話題に出ましたけれども、自分たちの住む地域に誇りと自信を持って生き生きと生活をして、それを次世代の子どもたちにしっかりとつないでいくというのが持続可能な地域の大原則だと思っております。

そのためには、どのような大きな地域でも、小さな地域でもそうですけれども、生きるためのさまざまな仕組みづくりというのは必要だと思いまして、1つは、働く場所だとか機会、雇用の循環というのと、あと、地域の中でお金をどのような形で回すかということ、もう1つが、やはり生きるために最低限の教育だとか、医療だとか福祉のサービスの循環を、小さな自治体の中でも動かしますけれども、ただ、それだけでは経済の循環とかいろいろなものができませんので、それを補う部分として、例えば、川の上流、中流、下流の流域の連携ですとか、三遠南信みたいな、圏域の連携があると思います。

特に、私ども森林が非常に多いです。92%が森林で、資源をたくさん持っておりますので、それを1つ、具体的に連携のお願いしたい部分で申しますと、やはり国産材を使って家を建てるとか建物を建てるのと、地域材といって、ある程度の固まった地域の材料を使って、そこでものをつくるというのでは全然趣旨が違うということで、地域材を使うということは、そこで、地元の山で働いて、山がきれいになって、そこでお金も得るし、森林も整備されるしということで、全体が整備されるという地域材の魅力があるので、ぜひ公共建築だとか、そういったものに関しては1つの大きな固まり、三遠南信地域では、この辺にある木をみんなで使いましょうとか、矢作川の流域でそういった流域材を使いましょうといった取り組みが1つの国土を保全する仕組みにもなるし、我々が働く地域づくりにも

なるので、ぜひそういうことをこれから皆さんの中で共有できればありがたいという動きをしていきたいと思います。

コーディネーター／豊橋技術科学大学

大貝副学長

簡潔にまとめていただきいて、ありがとうございました。

それでは、続いて今度は、てほへの理事長であります伊藤様から、連携について、取り組みを紹介していただきたいと思います。

NPO 法人てほへ 伊藤理事長

てほへの伊藤と申します。よろしくお願ひいたします。

今、事例報告で大脇のほうからご案内したのですが、我々の場合は、やはり交流館を中心として、体験を幾つか打っておられます。その体験を行うに当たりましても、町の行政の方々、あるいは小学校の方々と一緒に行っています。特に I ターン、U ターンをこれから増やそうというような活動をてほへの中ではやっていきたいということで、特に、小学校、中学校、高校生、そういう皆さんのが、この町のよさを理解してもらって、帰りたくなるような環境をつくっていくという考え方を持っています。

そのような中で、地元にある花祭をやろうとか、やりたいから帰ってくるという人が、今、2、3増えつつありますので、これはかなり期待が持てるなと思っています。

体験などを打つときにも、小学校とか中学校のほうへは必ずチラシとかそういうものでご案内をさせていただきいて、先生方と一緒に参加していただくような形をとっています。今後、I ターン、U ターンを増やすためには、そういうことが必要かと思います。

もう1つは、帰ってきても何をやるのだという問題がどうしても出てまいります。それには、交通アクセスがかなり完備されました

ので、ベッドタウン化というようなものも1つの方法ではないかと思います。そういうPRもこれからやっていったらいいと思っておりますので、のき山放送局のネットワークを通じまして、東栄町の魅力、もちろん奥三河の魅力を発信すると、そのようなものも方法の1つではないかと思います。

もう1つ言えることは、仕事を持った方、あるいは自由に山村生活をしたいというような方も若い人の中には結構おりまして、NPOのスタッフの中には、そういうニーズを求めてきている方もいます。そういう方の雇用契約というか、そういうものも、今後は考えなければいけないと思います。終身雇用が非常にいいことはわかっているのですけれども、それには拘束されるものもあります。特に私たちのスタッフの場合は、自由に働いて、自由に自分の生活を楽しむというような方もおりまして、山間地で生活するのには、都会と違って、生活コストはかなり違うという魅力もたくさんあるので、そういう魅力を皆さん、若い人たちにも理解してもらっていくのも1つの方法ではないかと思っておりまして、周辺の行政をはじめ、学校あるいは住民の皆さんと地域の魅力を発信していくかと思っております。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

3名の方から、連携して取り組むべき課題ということで、ご発言をいただきました。根羽村の村長が簡潔にまとめてくださったのではないかと私は思っております。基本は、それぞれの自治体で雇用の創出であるとか、医療、福祉あるいは教育といった面でサービスを提供していくということですが、それぞれの自治体では困難な部分もあるわけとして、それは設楽町長から話があった、情報基盤であるとか、あるいは公共交通のネットワーク、

こういったものを連携していくということが取り組みとしては重要な課題ではないかということだと思います。

それでは、最後、4名の方にまだご発言をいただいておりません。

これまでのそれぞれの地域における移住・定住に具体的につながった事例を、あるいは、なぜそれがうまくいったのかといったあたりについてご紹介をいただけたらと思います。

最初は、東栄町の村上町長からご発言をお願いします。

東栄町　村上町長

東栄町長の村上でございます。よろしくお願ひいたします。

それでは、私のほうから、1点目が、まず、先ほどNPOでの話もございましたので、この辺のところは省略させていただきます。今後も、東栄町、地域を知っていただくための交流事業を、てほへを含めて、行政も協力して、町の魅力、情報発信をしてまいりたいと思っております。

それから、平成24年度から空き家の改修をしてきて、そこに定住促進の空き家活用事業を進めております。平成24年度から3戸ずつを改修させていただきましたので、平成26年度までに9戸の改修をしてしまって、現在、そこに31人の方に定住いただいております。大人が17人、保育園以下が7人、小学生3人、中学3人、高校生1人というような状況でございます。引き続き、今年度も空き家の改修をしておりまして、これにつきましては、町がまず空き家の所有者から10年間借り受けるというところでございまして、予算の範囲内でリフォームをして、Uターン、Iターン者に賃貸をして、その空き家の、いわゆるリフォーム代に応じて分配するという制度でございます。10年後は空き家所有者と入居者の直接の契約に移行するということでございまして、

その仕組みをつくった中で、現在、4年目に入っているというようなところでございます。引き続き、これも進めてまいりたいと思っております。

それから、地域おこし協力隊につきましても、平成25年度より3年間で延べ6名の隊員を雇用しております。既に卒業した1名は、昨年4月から、町内にあります古民家を利用しました体験型のゲストハウスを現在運用しております。卒業後、来年度以降も引き続き協力隊の募集をかけていきたいと思っております。

森林伐採作業員につきましても、Uターンの希望をとって、現在、約20名の方が作業員ということで従事をしておりますが、引き続き作業員の募集につきましては、3か月の研修期間を受けて採用ということをしておりまして、その3か月間の研修費用を町のほうで助成をさせていただいております。これにつきましても、引き続き進めてまいりたいと思っております。

高齢化率も高くなつてまいりまして、医療職員、介護職員が非常に不足してまいりました。したがいまして、来年度から、介護職員等も、その研修期間についての補助制度を何とか拡充しまして、確保に努めてまいりたいと思っております。

もう1つ、先ほど、NPO てほへの伊藤さんのほうからもお話がありましたように、新東名高速道路が開通し、なつかつ将来、これで、東栄インターチェンジに向かって三遠南信自動車道が開通を迎えます。それにつきまして、やはり東栄町に住んでいただいて、通勤圏内も約120キロメートル圏内は1時間から1時間半の圏内になつてまいりますので、静岡方面は掛川市の方面、それから、伊那・信州は飯田、愛知県側は名古屋という圏域までは当然通勤圏内に入つてまいりますので、来年度より、通勤費の補助制度を設けて、定住施策に努めてまいりたいと思っております。子育てにつきましては、都市部と違いまして、塾も

ございませんので、公営塾を来年度あたりから検討してまいりたいと考えております。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

東栄町については、最初の大脇様からの活動もありましたし、定住がかなり長い期間かけて進んできているということだと思います。

それでは、続いて、阿智村の熊谷村長から、お願ひいたします。よろしく。

阿智村 熊谷村長

昼神温泉のあります阿智村の熊谷でございます。時間もありませんので、端的に申します。

いい事例といえば、阿智村は今、日本一星空がきれいということで認定いただいたものですからやっておりますが、その中で、1人の女性が、その星のガイドとして星のもとで働きたいからということで仙台から来て住んでくれています。その方は芸能もやっている方なのですが、私どもの阿智村がいいからというわけではなくて、やはり自然だと、お祭りだと、そういうものに魅力を感じてくださっていますので、まさにそういったところにヒントがあるのではないかなど感じております。

阿智村も、今、年間120万人の観光客が来てくださっているものですから、先ほどもどなたかが言つていらっしゃったように、交流人口の増加によって住んでみたい、そして、教育ということもすごく大事なので、子どもたちがずっとそういうものを経験することで、いつかはUターンしてもらいたいということを思いながら、何とか、もがき苦ししながらやっております。

このあたりは、どの市町村も本当にがき苦しんでやっているのが人口の対策だと思います。いろいろなことを考えるのですけれど

も、やはり人が住んでくれないと、行政というのは成り立ちませんので、最後は住まなければいけないと思っております。そういうことで苦しんでおります。

ですから、私の提案ではないのですが、各市町村でいろいろ、それぞれがどうだ、どうだとやっていることも大事なのですが、せっかくこの三遠南信という組織がありますので、今日も3月1日から「三遠南信特産品ガイド」が始まるというのが出ましたので、これとあわせて、定住ガイドみたいなものをつくっていただきて、観光の連携だとか、祭りの連携とか自然の連携、そういうたくくりで、東京や名古屋の大勢の方に、ぜひこの三遠南信に来ていただけるような、そういう取り組みをぜひお願いしたいと思っております。

今のところは、これはウェブサイトが1番だと思います。三遠南信という言葉はなかなか全国にはまだ響いていませんので、最初は仕方がないので、東三河とか、そういうくくりで入っていけばいいと思いますけれども、そういうところをぜひお願いしたいと思います。SENAの中にも、全国に、定住にぜひ来てくださいと周知するような営業マンを2、3人くらい置いていただくとありがたいと思いますので、お願いして終わりにいたします。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

それは、飯田の市長にしっかりとお願いしてください。SENAもなかなか大変だと思います。

ありがとうございました。星がきれいということで、何万人の観光客が増えたということのようです。

それでは、続きまして、泰阜村の松島村長からお願いいたします。

泰阜村 松島村長

地方創生の総合戦略を作成して、過去5年の数字を見たら、4年間は社会増でした。もちろん5人とか、3人とかという人数ですが、そういう点では、泰阜村にも転入者がいるのだなと思っておりますが、余りよい事例はございません。

泰阜村は、地域おこし協力隊が根づかない村だと言われております。現在1人は定着しているのですが、3年過ぎるとみんな出て行ってしまうというようなことでございます。実は、村そのものが中途半端で、私は、和合むらのようなところが、これから人が大勢来て住むようになると思っています。それは、和合という、まさに本当に都のちりも通いこぬ地域であるというところに住むということだと思います。大脇さんとのほへのように、目的があって集まることもできます。でも、泰阜村のようなところは中途半端で、例えば、どこかに働きに行かなければならないけれども田舎に住む、という人を呼ぶにはどうしたらいののか考えさせられます。

逆に、この泰阜村のようなところで、山村の生活を本当に体験したいというか、遊休農地を借りて農業をやりたいという人が、たまに来るという話があります。また補助施策を行政は用意してあるのだけれども、基本的には、やはり何を売りにやっていくのかということをはっきりしてこなかったので、転入者はいるのだけれども、本当の意味でのよい成功事例というのは余りないのかなと思っております。

大脇さんがお話をされた、田舎に移住・定住するには、地域愛と覚悟、そして、プライドが重要だということは、移住・定住者にとって重要なことではなくて、我々のようなもともと住んでいる、いわゆる原住民に必要だと思います。地域愛と覚悟とプライドが原住民にないのです。そういうようなものが住民にあって、住民が生き生き暮らしている

という姿を見ると、移住・定住者が、「ああ、やはり行ってみようかな。」と思うようになるのかな、と思ったりしています。成功事例は、その集落に住む皆さんが、山で何もないけれども、人がいいとか、とても生き生きと暮らしている、というようなことではないのかと思います。

大南さんや大脇さん、吉田さんもそうだと思うのですが、コーディネーター役というか、キーマン、キーウーマンという人がいて、そういうことを一生懸命やってくれるということが必要で、そういった人をつくるなければいけないのかなと思っています。

成功事例というより、そういうような考え方をしていかなければいけないのかなということを思っているということで、報告にかえさせてください。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

キーパーソンという話は、昔、愛知大学と豊橋技術科学大学と、それぞれ三遠南信地域の自治体で地域づくりのプロジェクトをやっていましたけれども、その中で、愛知大学でいろいろ研究されて、やはり最終的には、キーパーソンが重要なのだということでした。ソーシャル・キャピタルのテーマということで、キーパーソンの重要性というのは指摘されていたというのを思い出しました。

最後に喬木村の市瀬村長、よろしくお願ひします。

喬木村 市瀬村長

1番答えづらいところにご指名をいただいて、大変困惑しております。実は、長野県の喬木村は、飯田市に三方を囲まれております。そこずっと、人口は7,000人くらい続いておりまして、それは言っても、少子高齢化の波ということで、直近の国勢調査では、5%

も人口が減って、ついに6,400人くらいの村になってしまったということで、今、尻に火がついた状況になっています。

そのような中で、リニアの長野県駅が村の中心から5分のところにできる、それから、三遠南信自動車道のインターチェンジが村の中にもできるということで、これからは移住・定住というのは大きなテーマになってくるし、地域を守っていくのは、まずは人だということで、人づくりにも取り組んでいかなければいけません。今、村の中の中心課題となっているのは、国土交通省の進めております小さな拠点整備と文部科学省のICTを活用した教育の推進に資する実証事業ということで取り組んで、人づくり、地域づくりをさせていただいております。

成功事例の具体的なお話をということでございますが、こういう取り組みをしたから、このような人たちを呼び込むことができたというのはなかなか見えてこない部分がありまして、都会から来た人が入ってきて問題になるのは、やはり、いつもその地域との軋轢です。先ほど覚悟という話もございましたけれども、都会の風習との違いがあります。田舎には消防団とかいろいろな村役があつたり、地域とのお付き合いはどうしたらいいのだというので、地域の自治会ともめてしまつて、地域のコミュニティーから外れてしまつたりというような問題もあります。

数少ない成功事例としましては、各自治体の施策であります定住住宅ということで、これは、インターネットで公募しましたところ、横浜などから応募があり、住んでいただきて、今度は、そこに訪れたお父さんやお母さんに来てもらって、実際に住んでもらって、ここはいいところではないかと自分たちで家を建ててくれたということで、2世帯、3世帯の入居につながってきたという事例もございます。地域おこし協力隊で、2年くらい、女の子が入って暮らしているうちに、なぜかわかりませ

んが、お付き合いをしていた男性が、東京の仕事をやめてその方についてきて、この村に住んでくれたということがありました。その理由となるものは、この村の中に何があるのだというのは私たちもよくわからなくて、あるのは山と空気と水なのです。でも、ここに暮らしてみて、「ああ、ここで一生暮したい」と思わせる何かがあるというのは、これから私たちが見つけていかなければいけない、独特な都会の方の感性なのかなと思っています。

過去の経験を振り返ってみると、どうしても地域の中に都会の方も入っていただいて暮らしていただかなければいけないということなので、村の古民家などを活用して、お試し移住制度といいますか、1週間なり、2週間なり、この地域の中で暮らしてもらって、この地域に暮らすにはこういう覚悟が必要だということを理解した上で住んでいただかないと、村の中も、ただただ移住者を増やせばいいという話ではなくて、良好な地域のコミュニティーをつくるためには必要なのではないかなと思っていました。

それとあとは、先ほど述べましたように、各自治体で出ている施策というのは、大体もう皆さん、手を尽くしているということになります。そこで、泰阜村長がおっしゃったように、大南理事長のような、圧倒的なマンパワーを持つ人と行政がどうやって手を組んでこの地域をつくっていくかというところに足を踏み込んでいかなければいけない時代なのだと感じております。

コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

南信州の場合は、飯田を中心に広域連合がありますので、広域連合として移住・定住をどう進めていくかという視点が僕は重要な件と今聞いていて思いました。リニアのこともありますし、これからはそういう観点で進め

ていくべきではないかと思いますが、それそれがというとなかなか厳しいところがあるのかなと、聞いていて感じました。

それでは、これで1通り全員の方にご発言いただきましたので、最後に、今日、コメントテーターとしてご参加いただいております大南様よりコメントをいただけたらと思います。簡単で構いません。よろしくお願いします。

コメンテーター／NPO法人グリーンバレー 大南理事長

三遠南信の首長とは、これまで何度かお目にかかる機会というのがあって、今日もまたお会いできてよかったですというような気がしています。

例えば、先ほど私のほうで申し上げましたが、WEEK 神山という宿泊施設ができたわけです。そこが昨年10月にインターネットに求人を出しました。料理人と、そのサポートする人の求人を出したら、何人か応募があったわけですが、結果的にアムステルダムでシェフをしていた女性とフィレンツェでバリスタをしていた女性が選ばされました。今、2人とも彼氏をアムステルダムやイタリアに残して神山にやってきて、それで生活をしているというようなところがあります。

また昨日、同じアムステルダムから、3年前に神山アーティスト・イン・レジデンスに招待された女性が、神山にファブラボができるという話を聞いた途端に、「私、ファブラボができるなら、神山に移住してくる」と言って帰ってきました。

結局、どういうことかというと、横浜とか東京とか名古屋というように目がいきがちですが、多分人財のマーケットは、ある面、海外にも目を向けておく必要があるのではないかかなと思います。

逆に、東京とかで住んでいる人よりも、海外で体験した人たちというのは、こういうよ

うな山ばかりの場所で、何もないと思われるようなところにひかれるところがあるのだと思います。

西洋社会というのは冷たいところがあります。ところが、この三遠南信とか神山のような田舎のところに入ってきたら、やはり人間が温かいから、そういう場所を求めている人がいるということを少し考えておく必要があるのではないかと思います。

それと、地域の覚悟という問題もあるように思います。日本の地方とか田舎は、入ってくる者に変化を求めます。「私たちは、もう何百年も守り続けてきた伝統があるから、入ってくる人たちが自分たちに合わせて変わるべきだ」と、入ってくる人間に変化を求めるのだと思います。しかし今後の移住を考えた場合には、「君たちも変われ。でも、住んでいる自分たちも変わる」という覚悟が求められると思います。だから、両者の歩み寄りが必要になってきます。

つまり、「私たちには守ってきた伝統がある」と言うのですが、それなら、500年前の伝統を今現在、同じように自分たちが続けていているのかというと、そうでもないわけです。その時代に合うようになんと変えてきているわけですよ。でも、頭の中は、昔の江戸時代の前からのものを受け継いでいるみたいな錯覚に陥っていると思うのです。そこが結構、移住者との間のトラブルを引き出すもとになるので、自分たちもこれまで変化させてきたことをきちんと見る必要があると思います。

例えば、神社で楽車が出たりするときに、昔、私たちが小さいときは、楽車には男の子だけしか上れなかつたわけです。今は女の子でも全て、「いや、子どもなら構わない」みたいになっていて、あれは変えてきているわけです。ですから、そういうように柔軟に対応してきているというところは、新しい物事が起こるときには、やはり自分たちも柔軟に対処する必要があるのではないかなと思います。

それと、吉田さんが先ほど言われたように、さくさく受け入れるということ、これは非常に重要だと思います。例えば、日本の地方では、よそから、「こんなことがやりたい」と若い人たちがアイデアを持ち込んできた場合、そのアイデアを聞いた途端に「いや、そんなことをやられたら困る」と止めてしまします。なぜでしょうか？自分が持っている枠に合わないということだと思います。こうした枠は例えば、「昔、10年くらい前に同様な話を聞いて、えらい目に遭った」ということが1つの枠をつくるわけです。一度枠ができると、その枠の中でしか物事が考えられなくなります。つまり、枠の大きさのものしか生まれないということです。

神山が意識的にやっていることは、入ってくる人たちに対して、謙虚に向き合うということです。「あなたが言うことを私たちもはつきり理解できない」から止めてほしいというのではなくて、「目の前でやってみてくれ」とやらせていることだと思います。その結果、自分たちが予期しないことが次から次へ起こっていくということなので、まず、自分たちの枠をぶっ壊すということが、非常に重要なポイントになるのかなと思います。

さらに月並みですが、最終的には、やはり最大の資源は「人」だと思います。観光でいろいろな景色があるとか何とか言っても、やはり人は人にひかれて来ます。そこで、地域の人と外から訪ねてくる人が触れ合う、集まる場が必要になります。道の駅がありますが、道の駅は地図情報を与える場所であり、道の駅に欠けているものは、人の情報だと思います。町には人の情報を伝える場所が必要です。例えば、何か南信州の歴史に関心があるという人がぽつとやってきたときに、「ああ、あなた、南信州の地域史に関心があるなら、詳しいおじさんがいるから、呼んであげるわ」と、つなげてくれる場所です。三遠南信のおもしろい人に会おうと思ったら、とりあえずあそ

こへ行ったらという場所をつくる必要があると思います。

コメントになっているような、なっていないうな話ですけれども、私のコメントとさせていただきます。

どうもありがとうございました。

**コーディネーター／豊橋技術科学大学
大貝副学長**

どうもありがとうございます。

地域づくりというか、地域おこしの、まさに神髄の部分のお話があつたかと思います。

ここで、最後、この後にあります報告会に向けまして、この「山・住」合同分科会の意見の取りまとめをさせていただきたいと思います。

今日ご発言いただいたものを大きく3つの視点に分けて整理させていただきます。

まず1点目は、三遠南信地域、特に、既に語り尽くされているこの中山間地域の持つ魅力のある地域資源という利点、あるいは新東名高速道路の開通、行く行くはリニアが通る、三遠南信自動車道もできてくるという生活面での利点、そういう利点を圏域内外に積極的に情報発信することで交流人口の増加を図っていくこと、観光客を呼び込むというこということが、1つ重要な視点だということです。

2点目については、今日の話の中心になるかと思いますけれども、この三遠南信地域だからこそできるライフスタイル、これをそれぞれのところで見出して、それを圏域内外にPRしていくことです。雇用の確保であるとか子育て支援、あるいは住居の提供、こういった移住・定住に通じる事業を展開することで、中山間地域の持続可能な地域づくりを推進していく必要があるだろうということ、これが2点目です。

3点目としては、この三遠南信地域の自治体間の連携という視点から見ますと、地域の公共交通であるとか、あるいは情報基盤のネ

ットワーク、こういったものをきちんと整備・維持をしていくことが、これからそれぞれの市町村の連携にとって重要であるということです。

以上3点で、この「山・住」合同分科会の取りまとめとさせていただきたいと思います。皆様ご協力、本当にありがとうございました。以上をもちまして、「山・住」合同分科会を閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。